



濠門長恭

突撃！ 戦車娘

成層圏の飛燕  
～海女翔けるとき

W. A. S. P.



## 目次

### 突撃！ 戦車娘 - 4 -

- 1 . 暴発 -
- 2 . 惨敗 -
- 3 . 尋問
- 4 . 屈服
- 5 . 反撃 -
- 6 . 殲滅 -
- 7 . 凱旋 -

### 成層圏の飛燕～海女翔けるとき

- 1 . 空中衝突
- 2 . 公然制裁
- 3 . 敵前逃亡
- 4 . 前縁改造
- 5 . 新型爆弾
- 6 . 処女登楼
- 7 . 慕情昇天
- 8 . 天女特攻

W.A.S.P.

1. 捕虜-

2. 娼館

3. 商売

4. 演技

5. 脱走-

後書き

# W.A.S.P.

W A S P : Women Airforce Service Pilots

第2次大戦中に活躍した、アメリカ合衆国の女性パイロット軍属組織。試作機のテストフライトや実戦機の前線への空輸など、危険な任務に就いた例も少なくない。

## 1. 捕虜

コクピットの中でパトリシアは、お尻をもじもじさせていた。高度1万フィート（3千m）。気温は地上より20℃も低い。身体が冷える。空母を飛び立って5時間。限界だった。

パトリシアは左右を見まわした。縦長顎のP40が空いっぱいに広がっている。全部で45機。たがいに百メートルは散開している

から、顔を見分けるのがやっと。中でなにをしているかなんて、わからない。

パトリシアはズボンをパンティごと膝までずり下ろした。まだ少女の硬さが残っている33インチ（84cm）のヒップが、クッション兼用のパラシュートにじかに当たった。

身をかがめて座席近くの床から蛇腹管を起こした。ラッパ状に広がった管の先端には、紙コップが即席に貼りつけてある。

座席の端にヒップを乗せて。ふっくら盛りあがった恥丘をうっすらと蔽っている淡い金色のヘアを押し上げるようにして、左手で紙コップを股間にあてがった。紙コップに放出された液体は畿外に吸い出される。

ほうーっと長い息を吐きながら、パトリシアは生理的欲求を満たした。

管をもどして、両手でズボンを引き上げる。手をはなした操縦桿にズボンがひっかかって、機体がグラリと傾いた瞬間。赤い光の束が左の主翼をかすめた。

(え……？)

光の束がスウッと寄ってきた。

(……！？)

光の正体がわからないまま、パトリシアはとっさにラダーペダルを蹴った。操縦桿を右斜め前へ突く。

ブロッ……マイナスGで咳込むエンジン。

グワッ！

斜め前を飛んでいたP40が火の玉に包まれた。

(敵！ 攻撃！！)

さらに操縦桿を突きながら、スロットルをいっぱいにした。

ブロッ、ブウウウ、ブロッ……回転が上がらない。

胴体すれすれを赤い光の束がかすめて、それを追いかけるように、大きな黒いシルエットがパトリシアを追い抜いていった。

WASPは戦闘部隊ではない。空戦の訓練は受けていない。パトリシアは本能的に反射

的に（そして滅茶苦茶に？）操縦桿を振りまわした。射弾を回避できたのは偶然だった。たった2時間で単独飛行を許された彼女の天性を、幸運の女神が愛でたのかもしれない。

パトリシアは自機をひき起こしながら空を見わたした。四発飛行艇が太い煙を吐きながら飛んでいる。誘導機のサンダーランドだ。

そして、あたり一面に。火の玉、煙の輪、錐揉みしながら落ちていく機体。

一撃をかけて航過した敵機は、急旋回でこちらに向かってくる。

（どうしよう……どうすれば？）

パニック寸前。

（とにかく逃げなくちゃ！）

フェリー部隊の任務は交戦ではない。ドイツ空軍の攻撃で壊滅の危機に瀕しているイギリスの基地に、このP40を届けること。

（そうだ！ 落下タンク）

フェリー用のばかりでかいタンクをぶらさげているは速度が出ない。

ドロップ・レバーを引くと、グンと機体が浮きあがった。ほとんど同時に、また、赤い光の束が腹の下をかすめた。間一髪だった。

パトリシアは操縦桿を力いっぱい引きながら、後ろをふりかえった。尾翼にぶつかりそうなくらい近くに、巨大な黒いシルエットが喰らいついていた。

パトリシアの滅茶苦茶な操作は、進行方向に関係なく機種を上下左右に振りまわしている。つまり、敵から見ると飛行経路の予測ができない。コマ数秒先の未来位置に向かって射撃するのだから、数メートルの誤差が生じる。

それくらいはパトリシアも知っていたが、この場合は、本能的に（なかばパニックに陥って）三舵を突き動かして、結果として巧みな射弾回避になっていた。

気が遠くなるほど長い時間、パトリシアは追いまくられ、何度も銃弾を浴びせられた。

いつのまにか、眼下は海でなく大地に変わ



っていた。

(助かった……)

近くの基地からスピットファイヤが救援に駆けつけてくれる。一瞬の気のゆるみが、パトリシアの動きを止めた。

ガン、ガン、ガン！

激しい衝撃。右の主翼がへし折れた。

——その直後からの行動を、パトリシアは覚えていない。気がつくやうに草原に倒れていた。すぐ横に白いパラシュートが広がっている。

上空で二機の単発機が旋回していた。

立ち上がって。振ろうとして上げかけたパトリシアの手が、肩のあたりで止まった。

(違う……)

スピットファイヤの楕円翼ではなかった。P40にしては機首が細い。

(メッサーシュミット！)

パトリシアは目の前の林へ逃げこもうとした。そのとたん、敵機が急降下してきて、林と彼女とのあいだに銃弾を打ちこんだ。

思わず、地面に突っ伏した。立ち上がって走ろうとすると、もう一機が射ってくる。最初の機は急旋回で、こちらに引き返して来る。

林まで逃げられない。パトリシアが向きを変えて草原へ逃げると、射ってこなかった。

グーン……

別の方角から爆音が聞こえてきた。P40だった。4機のメッサーシュミットに囲まれている。生け捕りにされたのだ。

それは、パトリシアも同じことだった。

イギリス上空でメッサーシュミットが、こんなふうのにんびりと飛んでいるわけがない。たぶんここは、ドイツ占領下のフランス。上空の戦闘機は、地上部隊が彼女を捕まえに来るまで見張っているつもりなのだ。

5分としないうちに、サイドカー付きのオートバイがやって来た。近くをパトロールしていたのだろう。上空では微笑んでくれた幸運の女神も、乗機を捨てたパトリシアを見は

なしたらしい。

「ハルト！ 動くな！」

制服姿の男に銃を向けられて、パトリシアは両手をあげた。

もうひとりの男が、その手を背中へ引きおろして。ガチャリ。手錠を掛けた。

(……？)

その男が奇妙な顔をした。

「きゃあっ……！」

背後から乳房をつかまれて、パトリシアはしゃがみこんだ。

膨らみをたしかめるように、もぎゅもぎゅと揉まれた。飛行帽が筆り取られて。そばかすの浮いた顔に、金色のショートボブが、ぱさりと乱れた。

子供っぽさをとどめてふっくらしている頬、ちょっぴりうわむいた小さめの鼻、たてつづきのショックにわなないている唇と大きく見開かれた目。そこに戦闘機パイロットの顔はなかった。

「フラウ！ ユング！」

銃を構えているほうの男が、驚きの声をあげた。しゃがんだことで強調されたヒップの丸みに、目が吸い寄せられている。

この瞬間、パトリシアの運命が決まった。

——パトリシアは近くの街にあるゲシュタポの支部へ連行された。後ろ手錠のまま、尋問官の前へ立たされる。

「名前と所属、それに階級は？」

「パトリシア・マクミラン。W A S P に所属。  
階級は——無いわ」

部屋の隅には記録係が座っていたが、タイプライターを打とうともせず、ふたりのやり取りを眺めている。

「ワズプ？」

「**Women Airforce Service Pilots**——陸軍航空隊を支援する女性パイロットの組織よ」

尋問官は一人合点にうなずいた。

「軍人ではないのだな。レジスタンスやゲリラの同類だ」

尋問官は腰のワルサーを抜いて、スライドを引いた。

ジャキッ……ン。

間違いなく実弾のこめられている拳銃が、パトリシアの頭に突きつけられた。

「この場で殺されても文句は言えない」

カチカチカチ……耳障りな音が聞こえていた。自分の歯が鳴っているのだと気づくまでに数秒かかった。

捕虜になったときのことなんて、これまで考えたことはなかった。ジュネーブ条約で守られていると、なんとなく信じていた。

いきなり射殺だなんて……！

「でも……わたしの任務は輸送です。ゲリラなんかじゃありません」

「武器を搭載した戦闘機に乗って領空を侵すのは戦闘行為だ。空戦までしている」

「射たれたから逃げただけです」

「素直に撃墜されていれば、おまえの言い分もすこしは本当に聞こえたかもしれんな」

こめかみに銃口が押しつけられた。

(神様……！)

パトリシアはきつく目を閉じて、最期の瞬間を待った。

が……銃声は響かなかった。

おそるおそる目を開けると、尋問官が薄嗤いを浮かべてパトリシアを見つめていた。

「チャンスを与えてやろう」

尋問官は安全装置を掛けて拳銃をホルスターにもどした。

「おまえに抵抗の意志がないこと。おまえが間違いなく女であること。このふたつを証明できるなら、女性専用の収容施設へ送ってやろう」

言いながら、尋問官はパトリシアのジャケットを肩から剥いだ。シャツのボタンに手をかける。

「いやっ！」

パトリシアは身をよじった。

尋問官の手がワルサーにかかる。

「抵抗の意志ありと認めるぞ」

うぶなパトリシアにも、尋問官の意図は明白だった。と同時に、『女性専用の収容施設』がどういう性質のものか、理解できるような気がした。

(生きていれば……きっと、希望はある)

パトリシアは尋問官に向きなおった。目を閉じて辱めを待った。

「そうそう。物分りがいいぞ」

尋問官は顔をだらしなく緩ませて、シャツのボタンをはずしていった。

シャツが肩から剥がされて、ジャケットといっしょに手錠のところで絡まった。ショート丈のシュミーズとブラジャーは肩ひもを千切られて頭上に引き抜かれた。

厳しい訓練で無駄な脂肪がそぎ落とされ、それでいてやわらかく丸みをおびた上半身。34インチ（86cm）のバストの先端で、ツンと尖った乳首が小刻みに震えていた。

「きゃあっ……！」

乳房をつかまれて、パトリシアは悲鳴をあげた。手を振りほどこうとしたが、指が乳房に食いこんでぎりぎり締めつける。

「痛い……やめて……！」

パトリシアは目に涙をにじませながら、尋問官に身を寄せるしかなかった。

「うむ。男ではなさそうだ」

パトリシアの苦痛と羞恥を無視してうそぶく尋問官。

「しかし、より確実な証拠が見たいな」

尋問官の手がズボンにかかった。

「あ……」

バストが大きく揺れた。が、パトリシアはもう逃げなかった。ズボンが一気に引きおろされる瞬間を、パトリシアは歯を食いしばって耐えた。

くびれたウエストにつづく33インチ（84cm）のヒップと引き締まった太腿。かすかな産毛がプルプル震えている。その産毛が、いっせいにぞわあっと逆立った。尋問官の手



が、最後の1枚にかけられたのだった。

(生きるんだ、生き延びるんだ！)

パトリシアは、ありったけの意志の力で、その場に立ちつづけた。羞恥で肌が染まっていく。

そんなパトリシアの反応を愉しむように、尋問官はパンティに両手を差し入れて、尻肉を掌でたっぷり撫でまわしてから、ゆっくりとパンティを膝まで下げた。

けぶるような金色のヘアと、その奥に隠されている割れ目が尋問官の目に晒された。

「たしかに女だ」

例の場所へつれていけと、尋問官は記録係に声をかけた。

乳房への仕打ち以上の屈辱を予期していたパトリシアは、拍子抜けした思いだった。しかし屈辱は、まだ終わっていなかった。服を脱がされた姿のままで部屋から追い立てられて、パトリシアは抗議の声をあげた。

「ちょ、ちょっと待って。服を着せてよ！」

記録係は尋問官の真似をして拳銃を抜き、パトリシアに銃口を向けた。

「抵抗すれば脚を射つ」

尋問官ほどではないが流暢な英語だった。

密室で裸にされるのと、そのまま外へ連れ出されるのでは、恥ずかしさがまるで違う。けれど、従うしかなかった。脚を射たれたら——脱走できなくなる。

うっすらとピンク色に火照っていた裸身が、すうっと白くなった。パトリシアは足首に絡まるズボンを蹴とばすようにして歩き始めた。